

## 小山寺の吉右衛門屋敷

今を去る三百數十年の昔、八郎湖の主八郎は美男であり田澤湖の田子姫も又稀有の美女であった。此の青春に燃える花も恥らう美男美女のいとも奇しき戀に耽つたといふ。此の話は一エピソードである。

毎年冬になると八郎は田澤湖に忍んで来て翌春の彼岸の來るまで限りない楽しい生活に耽つてゐた。それ故冬になると主の留守である八郎湖は結氷して荷馬車が容易に渡り得るやうになり春彼岸の中日に八郎が歸るとさしもの堅い結氷も一夜の中に解けてしまふといふ。さて此の八郎が田澤湖の田子姫に忍び通ふ、その往復には一定の宿所があり必ずそこに宿泊したと傳へられてゐる。宿所とは即ち小山寺の赤坂吉右衛門宅であった。吉右衛門といへば慶長から正徳までの俗にいふ親郷で當時郡奉行の威勢を凌ぐ勢の盛んな錚々たる家であつた。此の吉右衛門宅に吹雪の烈しい霜月の九日に何處からともなく一人の若い美男が訪れて一泊を乞ふた。吉右衛門

家では心よくその乞を容れ、これを懇ろにもてなした。これが  
の九日頃になると必ず此の若者が訪れたものである。

此の若者は不思議な事にその住所や商賣などを明かにしな  
「なあに私は定つた住所もなくまたこれぞとした商賣も持つて  
氣儘にぶら／＼あちらこちらを旅して歩くのですよ。」

と自分の素性などは、はつきりさせなかつた。而かも自分の身  
とを非常にいやがる様な氣色さへ多分に見えた。吉右衛門家  
思議を持ちはしたが、然し旅の者とは、みんなこんなものだら

議立もしなかつた。何處からともなく来て、何處ともなく去つ  
若者の定期的宿泊は二三年續いた。若い快活な而かも美しい社  
取つてもあか抜けのした此の若者、最初は不思議な旅の者とし

度重なるに従つて彼への疑惑もすつかり消えて此の若者に對す  
くののだつた。丁度来る頃になると、家内中皆が心待ちに待つ様  
こゝの家に七十一才になる老婆が一人あつたが、此の老婆のみ

に對して何となく譯の分らない疑念を抱いてゐた。然しこれぞ

ものではなかつたが、只雲のやうな疑念だつた。

それは烈しい吹雪の日だつた。猛襲する吹雪にどこの家も皆あらゆる戸口は閉め  
てそれこそ眞の冬ごもりだつた。そうした猛吹雪に吉右衛門を丁度今の午後三時頃  
訪れた一人の客人があつた。幾度も叫んだ後と見えて相當の高聲を立てゝゐた。然  
し吹雪の音の為家中に聞こえぬらしく容易に人の出て来る様子は見えなかつた。客  
人は思ひ來つて静かに戸を叩いて呼んだ。するとそれが効いてか戸が開かれて家の  
人が顔を出した。

「まあひどい吹雪ですね、また御厄介になりましたよ。」

「おや、まあ、誰かと思つたら旅の方(吉右衛門家では此の若者(即ち八郎の事)を  
旅の方と呼んでゐた。)まあ、まあ、こんな吹雪に、さあ、さあ、お上り、お上り。」  
「では御厄介になります。ほんたうにひどい……。」

「ほんたうに、此の間の此の暴れつたら、どんなにまあ御難儀召されたやら、でも  
よく此の吹雪に御出でになすつたこと。」

客人の若者は、此の吹雪に少しの困憊も見せず相變らず快活に話した。ごう／＼と  
木々を鳴らし家を襲ふ吹雪に人々は皆その寂莫たる空氣に何ものかの情を戀ふるの

だつた。こうした時、此好まれてゐる若い旅人が訪れたので吉右衛門家にはばつと明るさが人々のその心に点じられた。家内中總動員で此の若者を待遇した。

酒は人々の心に快活を與へて時の移るのを知らなかつた。皆はしやいで面白おかしく語り合つた。此の若者の縦横の世間話や頓智は吉右衛門家の人々をしていやが上にも愉快がらした。然しこうした團樂もいたく夜が更けるに従つて漸やく倦怠を覺えて來た。

「まあ旅の方はお疲れてもあらうしおやすみになつていたゞいては。と誰かの口から出た。

「あ、そうだまあこんな吹雪を漕いでお出でになつてほんとうにお疲れなすつただらう夜も更けた事でもあるしおやすみになつていたゞいた方がいゝ。」

「なあにあんまり面白くつて、つかれも何すつかり忘れてしまつたが、まあ夜も大分更けたやうだし、やすましていたゞきませうか。」

余程酔が廻つてゐると見えて口が少しもつれてゐた。そしてこんなことを言った。

「わしや、妙なもので、自分の寝姿を見られるのが嫌でね、なんだかおかしいやうな事をいふやうですがどうかどんな事があつてもわしの寝姿だけは見て下さる

な。」

然しいひ終つた瞬間彼の顔色はきつと動いてあわてゝゐるのが顯かに見えた。それはいふべからざる事をいつたやうなあはて方だつた。然しすぐもとの平氣を装ひはしたが、こんなことをいつたのは此の日始めてだつた。この言葉は誰にも格別疑惑を或は不思議を抱かせたやうに見えなかつた。然し此の言葉が異様に強く響いた者があつた。それは此の家の七十一才になる老婆だつた。最初から直觀的に此の若者に對して或る種の疑念を持つて居たのに此の言葉があつたので、ぼつ然としてその疑惑が大きく固まつて來た。

人々はそれぐゝ寝に就いた。旅若者も或る一室に眠つた。老婆はぢつとしてゐられない好奇心にかり立てられてそつと床を起き上つて若者の眠つてゐる一室に行きその中をのぞいた。あつ！こは如何に、あの花も恥らう美男が見るも恐ろしい大龍に化してゐるではないか。きら／＼とうろこは青く光り、櫛のやうな太い胴はどぐろを巻きそのすさまじい頭は梁を枕にし、いびきは、大嵐のやうに響き、老婆は一目見るより卒倒せんばかりに驚いたが氣を強めて漸く我が寢室に歸つた。

明くる朝、若者は消然として床を起きて來た。その顔は蒼ざめて氣力は全くなく

なりあの快活な姿はどこにも見られなかつた。こうして大變した若者はいつた。

「昨夜お約束したのだつたが、私の寢姿を見て呉れた方がありましたね。」

これだけ言ひ残して早々として消然たる姿のまゝ出て行つてしまつた。

それから、此の若者は、八郎であつた事を知つて、人々は皆目を見合つて驚いた。そしてその約束を破つた事を悔いた。然しこんな事があつて次の年の六月、全く忽然として此の村に大洪水が押寄せた。その時この吉右衛門家の老婆は呼出されてくるかのやうに、その激流の中に「あれい」といふ悲鳴と共に吸込まれて行つてしまつた。それから毎年此の家に凶變があつて人々が變死した。斯くして數年ならずして此の家がすっかり斷絶してしまつたと傳へられてゐる。現在瀉尻川と檜木内川の合流地点のほとりに吉右衛門屋敷の荒廢せる跡がある。